



世界の子どものことばの教室

天使の都の小さな教室で親と子どもは共に大きくなる 「バイリンガルの子供のための日本語同好会」の歩み

池上 摩希子*

©2011. 「移動する子どもたち」研究会. <http://www.gsjal.jp/childforum/>

はじまりはお茶会

天使の都バンコクは、いつも、暑い。いくたび訪れてもそう思う。「バイリンガルの子供のための日本語同好会」のお母さんたちと初めてお会いしたのは 2007 年 3 月、4 年前のことになる。そのときは日本語の教室には伺えず、ホテルのラウンジで午後のお茶がてら、お話をしただけだった。仲介は深澤さん、「バイリンガルの子供のための日本語同好会」の日本語教室（以下、BKK 教室と呼ぼう、長いので）のアドバイザーであり、当時、早稲田大学日本語教育研究科で学ぶ大学院生でもあった。私と深澤さんの他に、教室でご自身の子どもたちの日本語支援に関わる 4 人のお母さん方が集まった。

「先生、ビール飲まれるでしょ？」と問われ、バンコクの暑さに、つい、「はい」と答えた。お茶の人、ビールの人、取り交ぜて、ざっくばらんに話が進む。教室運営の様子、ご自身の仕事、家庭内で何語を使うか、パートナーと子どもたちは何語をどのように使っているか等々…。環境を語りながらも、それぞれに、ご自身の娘さん息子さんの「ことば」について、心配をしている様子が伝わってくる。家では英語と日本語を使ってて学校ではタイ語でしょ、日本語能力検定を受けたほうがいいかしら、合格すれば自信になるわね、でもうちはどうかな、うちは上の子はアメリカの大学に行かせてるけど、下のはね…。

「継承語教育」と言われる問題は、世界中にある。深澤さんから BKK 教室の話を聞いたとき、さらに加えて、それぞれの言語状況による「継承語」の意味の多様さを感じた。このそれぞれというのは、国であり、地域社会、学校であり、家庭、養育者、子ども本人等々であ

* 早稲田大学日本語教育研究科 (Eメール: ikegami@waseda.jp)

る。従来の「継承語」というタームでは、もうひとくりにできないのではないか、そう考えていた矢先にめぐりあったお茶の会への参加機会であった。

2007年の問い——「これって、意味があるんでしょうか」

BKK 教室の立ち上げは 1997 年まで遡るが、深澤さんがアドバイザーとして参加したのは 2002 年の秋で、今の教室の原型はこの頃にできたらしい。月に 2 回、年にして 20 回、隔週の土曜の午前中にバンコク日本人会の施設を借りて、幼児から高校生までの子どもたちのための日本語教室を開いている。お茶の会で話したのは、立ち上げに参加した方や現在の運営に中心的に関わっている方であるから、自然と話にも熱が入る。この教室の特徴としては、お父さんやお母さんたちが先生やボランティアとして教室に参加していること、日本とタイの国際児である子どもが多く、生育環境において言語間文化間の移動が多いことがあげられる。幼児から高校生までを年齢と発達段階によって 5 つのクラスに分け、複数の担当者が担当し、クラスでいつ何をするかは担当者が決める。

担当者が内容を決める、これがけっこう大変なんだな、教室の話を聞きながらそう感じた。つきつめると、「いろんな子がいる中で、何をどうするのが一番「いい」のか、それがわからない」といった悩みが語られていたからである。そして、ひとりのお母さんから問われた、「2 週間に 1 回、子どもを集めて日本語を教えて、何になるんだろうって思ってしまうんですよ、先生、これって意味があるんでしょうか」。この後、私は 2008 年と 2010 年に BKK 教室を見学し、研修会に講師として参加する。自信をもって「教室には、意味がある」と思ってもらおう、それが参加を続けたきっかけであった。

2010 年から 2008 年を振り返ると…

2010 年 8 月の「第二回継承日本語ワークショップ」は、研修会の講師としては 2008 年に続いて 2 回目の参加であった。この日の午前中に教室を見学したとき、「前より動きが出たなあ」という印象をもった。この「動き」とは、大人の動きであり、子どもたちの動きである。BKK 教室の大人には教師役と教室をサポートするボランティアがいるが、双方が、あるときは分担しあるときは協力し、子どもたちの間を動きまわっている。子どもたちはクラス全体で応答したり、グループで話し合ったり、ひとりで作業をしたりしている。こうした動きが活動自体を動きのあるものになっている。いや、そもそも「活動を中心に」という発想は、以前はそれほど重視されていなかったのではなかったか。2008 年の見学時には、教室の後ろに立って目を閉じると、しばらくは先生の声だけが聞こえる、といったこともあったの

だ。2008年当時のBKK教室は、既に体験中心のテーマ型学習の考え方をベースにカリキュラムを整えていたし、高学年のクラスではプロジェクトワークも導入されていた。それでも、2008年の研修会では「家では日本語が中心なのに、日本語の単語、語彙が少ないように思うが、だいじょうぶだろうか」「2年生なのに、促音が書けない（注：聞き書きでの脱落、自発的に書くときの脱落の両方）」「日記の宿題でこんな短い文しか書けない、どうすればよいか」といった悩みが多く語られていた。

深澤さんは言う、「アドバイザーになってから、教室の時間を30分単位で3回のまとまりで使うように提言したり、複数の人で担当するようにしたり。2003年にはボランティア制も入れて、教室で教える役は荷が重いと思ってる人にも教室内外で手伝ってもらえる、いや、その形で参加できるようにしました。各クラスで何をするか、何をしたか、内容が共有できるようになったのもこの頃から」。では、その頃から教室全体のカリキュラムを作成し始めたのかと問うと、「それは、2005年ぐらいから。年少者日本語教育に出会って、意識しはじめたんです」。深澤さんは、しかしまだこの段階では「子どもにどうやって日本語を習得させればよいか」を中心に考えていた、と振り返る。長く日本語教育を専門としてきた立場として、日本語教育の方法論を生かして、効率よく習得させられる指導方法を探求していたという。その過程で、例えば、無理に覚えさせたりしない、興味があることをトピックやテーマとして設定する、といった「教え方」が徐々に自身の頭の中でも整理でき、教室に対しても示すことができてきた。

「なにかが違う」から創り出した変化

しかし…じっくり、こない。なぜだろう。今やっていること、やろうとしていることは、教室に来ているこの子どもたちの多様な状況と合っているのだろうか、子どもひとりひとりにとって日本語が持つ意味は違うのではないだろうか、だとしたら、方法と目的は合っているのだろうか。こうした課題を解決するためにも、深澤さんは大学院に進学した。2007年秋のことであり、大学院で更新した自らの考えを教室に反映させながら企画したのが2008年8月の研修会であった。このあたりのご本人と教室の変容や発展の詳細は、稿末にあげた雑誌記事やホームページの資料で参照していただくとして、ここで一点、強調しておくべきことがある。教室の変容と発展の核となっているのは、BKK教室のカリキュラムを「何を、どう教えるか」の固定的な計画ではなく、「学習活動の総体の履歴」（佐藤、1996）とした、ということである。こうしたカリキュラム観に立てば、カリキュラムは、①教室の目的 ②教室のあり方 ③学習活動 の3つを柱とした動的なものとなる。また、カリキュラムの記述として、活動計画だけでなく、過程と結果も記さなければならない。

年齢が違い、また日本語を含むことばの力も違う子どもたちが同じ空間にいる。そのクラスで何を教えればよいのか、どうすれば子どもたちは日本語を覚えるのかが、長く教室の課題の中心としてあったのである。深澤さんから BKK 教室に示された、それまでとは異なるカリキュラムは、教室に大きな転換を迫るものであり、だからこそ大変なできごとであったと推測できる。BKK 教室のメンバーならずとも、私たちが何かを行うときに、自分たちの経験をもとに評価し判断するのは全く普通のことであるから、「学校教育」で成功体験を重ねていけばなおさら、その規範からはなかなか抜け出せない。およそ 2008 年以前に教室に見られた「教師が説明する⇒子どもが聞く⇒みんなで活動する⇒みんなで達成する」という流れは自明のもので、そこからの逸脱は改めなければならぬものとなる。ところが、2008 年以降、アドバイザーによってカリキュラム更新の提案がなされた。これに基づくテーマ型学習は従来の流れでは動かない。予想外のことも多く起こる。手間もかかる。テーマ型で動かし始めても、お母さんたちから、具体的な授業のイメージが湧かないから従来通りのやり方でやりたいという要望が出されたこともあったそうである。深澤さんは、研修会や勉強会などを通して、「何を教えるか、ではなくて、どんな子どもを育てたいか、を考えよう」と働きかけを続けていった。意識の変化が徐々に始まった。

「どんなところで、変化がわかったか」というと、先生役のお母さんにインタビューしたときに、こんな意見が出たんです」と深澤さんは紹介してくれた。「以前のやり方との違いを聞いたとき、前はどうやったら子どもがわかるかじゃなくて、自分のやり易さで授業を考えていた、って。自分でこれをやらせようと思ったことを説明して、子どもにそれをさせておしまいだった、でも、そのやり方は、結局は子どもの能力差がはっきりと現れるような授業だったんじゃないかって言ってました。こういう内省ができるってすごくないですか。自分達の授業がむしろ子どもたちの能力の差を顕かに出していたんだって思ったんですって」。テーマ型を進めることですべての問題が解決されるわけではないが、起こした変化を題材に、ミーティングを持ち、時間を使った。①目的 ②あり方 ③学習活動 のカリキュラム 3 本柱について、話し合い、教室実践を重ねた成果と言えるだろう。

再び 2010 年、教室の意味は…

そして、2010 年の研修会である。午前中の授業見学に続き、午後の研修会ではみなさんの求めに応じて、私からコメントをしたり短い講話をしたりしたのだが、そこで、前回 2008 年と比べて今はどうかを話してほしいとなった。「前より、動きが出ましたね」と話を始め、具体的な指摘もしていったが、さらに私が付け加えたことは、子どもたちの成長についてであった。2 年という年月は子どもたちにとって、私たち大人が思うよりもはるかに長く重要な時間である。以前、中学年クラスで見た子が今は高学年クラスで活動している、その当た

り前のことを、どう考えたらよいか。大きくなったなど感慨深く思うと同時に、2年前にその子のお母さんが心配していた様々なこと、「これができない、あれができない」といったことは、今はもうそれほど問題ではなくなっているのに気づいた。その代わりに、とっては語弊があるが、また別の悩みを抱えているらしい。それを成長というんだらうな、との無責任な感想は口にせず、「こうした活動に、あまり即効性を求めないほうがいいと思うんです。この教室は目的から考えて、すぐに効果を測れるものではないでしょう。種を蒔いてからは時間がかかります。芽が出ても一旦枯れたように見えることもある、でもそれが肥料として資源になって、また芽が出ることもあります」、2週間に1回集めて、という問いに対する私からの答えのつもりでもあった。

さらに、BKK 教室を親が運営していることによって、この教室は子どもが日本語を学ぶための教室であるだけでなく、親やボランティアにとっても意味のある場になっていること、であるからこそ、子どもたちにとって、通わされている場ではなく、親と共に通う場になっていることを指摘した。この場で親と共有した経験を、子どもは教室外でも親や友だちと話すだろう。そのことで体験とことばを結びつけることができる。そして、体験を共有している親であればこそ、言語化の過程に意識的に入り込み、手助けもできると思う。

2011 年の答え——「意味がある」

2011 年も、暑かった。2011 年 3 月に私が参加したのは BKK 教室の「クラス編成」のための集まりで、次の年度はどういう編成でいくか、担当はどうするかを話し合うものだった。普段、「会議」は土曜のクラスの後の時間に設定されているのだが、今回はクラス編成案を作ったチームが、正式な会議の前にみんなの意見を聞きたいと自主的に招集したのでセミフォーマルなものといえるだろう。小さなレストランの 2 階、1 部屋は話し合い用、もう 1 部屋は一緒に来た子どもたちが遊ぶ部屋として確保されている。いろいろな年齢の子どもたちが親たちの話し合っている部屋を出たり入ったりしながら、カードゲームを楽しんでいる。ちょっと耳をそばだてると、日本語と、ときどきタイ語も漏れ聞こえてくる。

ひとつのクラスの担当から、次年度はこのようにしたいという提案が出された。すると、「だから、こういうことを決めるのに、そのクラスの担当者がもっと来ないとだめなんじゃないの」と言うお母さん。以前は、ミーティングは時間がかかるからあまり好きじゃないと思っていたそうだが、意見やアイデアを交換したり共有したりすることで、授業がよくなり自分も楽しいと気づいた、という。「あの一、いいですか、その提案はそのクラスのためにはいいかもしれないけど、BKK 教室全体のためには、どうなんだろう」、私、しゃべっていいのかな、と思いつつの発言も「そうですよね、そこを考えないと」と受け止めてもらえる。お母さんたちの変容が、見えるようだ。

この日から2週間ほど前に、「バイリンガルの子供のための日本語同好会」主催のセミナー（継承日本語教育セミナー）が開催されている。『一緒に考えよう、今私たちにできること』と題されたセミナーでは「保護者座談会」の時間も設けられ、BKK 教室のお母さんたちが参加者に向けて自分と子どもと教室の体験を語ったそうである。「そう…4年前には、意味があるんでしょかって言ってたんですよ…。それがセミナーで教室の外の人たちに、BKK 教室のような場を創る意味を、語ってくれました。意味がある、だから、みなさんもみなさんの子どもたちのために作りましょう、って」、深澤さんからの報告を感慨深く聞いた。

さて、話し合いも深澤さんがまともに入る時間帯だ。その頃に到着する方がいても、「遅くなりましたー。お久しぶりです、先生、あら、ビールじゃないの？…何、今、何が問題なの」とすぐに話の輪に加われて、「それがね…」と話が続く。隣の部屋から「お母さーん」と駆け出してくる子を抱きとめてメニューを見せながらも、話はまだまだクラスのことだ。親と子の BKK 教室は、こういった熱い思いによって、これからも続いていくのだろう。子どもはもちろん、大人も大きくなれる場所として在り続けることを楽しみにしている。

文献

AJALT 編集部 (2010). 親とボランティアが創るバンコクの継承日本語教室『AJALT』33, 35-38.

佐藤学 (1996). 『カリキュラムの批評』世継書房.

深澤伸子 (2010). 『親とボランティアが創る継承日本語教室の「意義」と「可能性」——タイの教室に参加してきた経験から』早稲田大学日本語教育研究科修士論文（未公刊. 概要：<http://www.gsjal.jp/kawakami/master.html#m10a>）

ジャーナル「移動する子どもたち」—— ことばの教育を創発する

第2号 2011年5月発行

発 行 者 「移動する子どもたち」研究会

代表 川上郁雄

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

早稲田大学日本語教育研究センター気付

電話：(03) 5346-1893 Eメール：kodomoni-hogo@list.waseda.jp

©「移動する子どもたち」研究会 2011.